

「お母さん」と「お父さん」の狭間で



山吉麻子

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科(薬学系)
[852-8521] 長崎市文教町1-14
教授, 博士(学術)
専門は核酸化学, 機能性分子化学.
asakoy@nagasaki-u.ac.jp
www.ph.nagasaki-u.ac.jp/lab/function/index-j.html

私はThe晩婚、The高齢出産である。不惑の年齢を超えて携わる育児の難しさに日々翻弄されているが、世の中の働くママ達の前で、「育児が大変」とはとても言えない。なぜならば、私の夫は「専業主夫」だからである。

夫と出会った頃、私は京都工芸繊維大学で助教をしていた。40歳を目前にして独身であり、周囲の方々からは結婚の心配を(かなり)されていたが、当時の私は助教であることに大変な焦りを感じていた。種々の公募に出し惨敗の続く中、清水の舞台から飛び降りる決意で京都大学白眉センターの特定准教授職に応募した。白眉センターに採用された特定教員は、5年間、ほぼNo dutyで研究に専念することができる。ただし、5年後の再任はない。京都工芸繊維大学ではテニユアの助教だったので、白眉に内定し異動すると言うと、中には「気でも狂ったの?」と言う方々もいた(注:多くの先生方は応援して下さった)。そんな頃に夫と出会った。

私よりはるかに学歴が高く博識な夫であったが、よくよく聞くと専業主夫をご希望とな。当時はお互いに共働きで高め合っていくような関係を理想に描いていたため、最初は受け入れ難かったが、夫の決意は固かった。何より非常に前向きな気持ちで専業主夫に挑もうとしていた。まあいいか、それほど前向きな気持ちならば……と、半ば(諦めて)受け入れようかと思っていた矢先に、妊娠していることに気がついた。悪阻が酷く、仕事にならない時期もあり、高齢ゆえか破水から30時間ほど陣痛に苦しんだ末に出産した際の痛みは言葉で表現できないほどであった。だが、本当の困難は産後の育児にあった。

育児の大変さに関しては、私が熱弁をふるうまでもない。しかし、いざ実際に挑んでみると、この大変さは想像以上であった。新生児への3時間おきの授乳、連続して眠れない日々が数カ月続き、やっと授乳を終えたのに全部吐いてしまう。やっと寝かしつけたと思ったら救急車の音でギャン泣き。何もかも上手くいかない。そんな状況にいて、ごく軽度ではあるが産後ブルーにもなった。産休が明け、仕事に復帰したときには、「やった! 自分に戻った!!!」、と叫びたいくらい嬉

しかった(だが一方で、そんなことを思う自分に、母親失格だと落ち込んだりもした)。

実家での産後休暇を終え、夫と息子との同居生活が始まり、私も仕事に復帰して徐々に研究生生活を戻していったが、ここで改めて周囲を見わたしてみると、とくに若い世代に、子育てに協力的な男性研究者が少なからずいることに気がついた。彼らは朝早く出勤し、仕事し、夜7時頃に帰宅して家事や育児を分担し、寝かしつけてからまたラボに戻って来る。そんな生活の中で素晴らしい業績を出していた。なんだなんだ、この差は。私は共働きですらないのに、それでも七転八倒しているこの状況は何なのか……。このことにも落ち込んだ。いっそのこと、夫が専業主夫なのだから、私は仕事をもっと優先して家庭を顧みなくても良いんじゃないか?、とさえ思った。けれども、夫にも息子から離れ、息抜きの時間が必要ということは産休で痛感していた。余所は余所、うちのうち、自分なりのライフ・ワーク・バランスをと模索した結果、「早く帰る日」と「仕事タップリDay」を作ることにした(一時帰宅後にラボに戻るのは、私には難しかった)。「早く帰る日」は気持ちを切り替え、夫を育児から解放し、私が息子と遊ぶ日とした。息子の相手は大変であるが、今でも素晴らしい喜びの時間でもある。

けれども、私のライフ・ワーク・バランスは、まだ最適化されていない。とくに仕事が行き詰まったときや、忙しく余裕がないときに、上述の育児の時間を確保するのは難しく、未熟な私はイライラしてしまう。また、一緒にいる時間が違うので、息子が夫に懐くのは仕方がないとわかっているのに、やはり寂しく思ってしまう。何かを得るときは、何かを失う。夫が専業主夫だから、私はこれだけ仕事させてもらっているのだ。私は(今の世の中で言うところの)「お母さん」から脱却せねば。どちらかと言うと、「お父さん」なのだ。いつまでも「お母さん」と「お父さん」の狭間をウロウロしてはいけけない。そして、受け入れられた暁には、全国の育児に頑張るお父さん達に言いたい。「お父さん達も、大変ですよ」と(全国のお母様方から反感を買うのを覚悟のうえです)。